

2016 年度博士論文（要旨）

高齢期の Well-being と未来時間展望との関係

桜美林大学大学院

池内 朋子

目次

I. 序論	1
研究の目的	6
II. 研究	7
1. 未来展望尺度の作成	7
1) はじめに	7
2) 方法	9
3) 結果	11
4) 考察	15
2. 高齢期の未来時間展望、社会的ネットワークの選択、感情的 well-being の関連	18
1) はじめに	18
2) 方法	21
3) 結果	24
4) 考察	27
III. 総合的考察	30
謝辞	
文献	

高齢期の Well-being と未来時間展望との関係

I. 序論

日本の 65 歳以上の人口は 2012 年に初めて 3000 万人を超え、2014 年には、総人口に占める割合が 25.9%となった（2014 年統計）。世界の国々と比較すると、日本は現在、最も高い高齢化率を維持しており、今後もさらに上昇することが予想され、2060 年には約 40%に達するとみられている（総務省, 2013）。

高齢化が急速に進む中、老年学という加齢に関する学際的学問が日本でも徐々に普及し始め、高齢期に関する様々な研究が蓄積されてきた。同時に、高齢期の変化や特徴を理論的に説明する試みが広まり、1960 年頃から老年学領域において様々な理論やモデルが提案された。1990 年代に入ってから、欧米を中心に高齢期の幸福感や加齢に伴う well-being の変化に着目した研究が多く発表された。

高齢期の Well-being の関連要因

これまでの老年学領域における well-being の先行研究をみると、たとえば Subjective well-being (SWB) を従属変数と位置づけ、その要因として社会的ネットワークの多寡に着目したものが多く。さらに、老年学領域においては活動理論 (activity theory) に依拠した研究が蓄積されているが、それらの研究の多くは親族など身近な人々とのネットワークだけでなく、地域組織との関係など必ずしも情緒的な関係にはないものでも、高齢者の SWB に貢献してきたという知見が提供されている。

高齢期の Well-being の関連要因に関する研究の課題

社会、健康、経済、心理という各要因の独自効果を検討した研究は多いものの、それらを構造的に捉えようという視点が弱い。本研究は、以上の要因の中でも、社会的要因として社会的ネットワークと心理的要因に着目し、その関係性を視野に納めた分析モデルの構築を試みる。社会関係を形成する人とならない人がいるかについては、ライフコース的な検討がなされてきているものの、心理的なメカニズムについては明確な理論づけがなされてこなかった。本研究では、未来時間展望に関する理論において、この理論づけが可能ではないだろうかと考えた。高齢者の中でも未来時間展望を広いと知覚する人が新たな人間関係や経験などを指向することでより広い社会的ネットワークを形成し、それにより感情的 well-being が高まるというモデルの可能性を考えたい。

研究の目的

本研究は未来時間展望の知覚に着目し、高齢期の感情的 well-being と関連する要因として、未来時間展望の知覚という心理的要因と、社会的ネットワークの選択という社会的要因

を取り入れ、これらの関連が高齢期の感情的 well-being にどのように影響するか検証を行う。検証は次の2つの研究によって実施する。まず研究1では、未来時間展望の知覚を測定する尺度（Future Time Perspective Scale; Carstensen & Lang, 1996）の日本語版を作成する。研究2では、研究1で作成した未来展望尺度を用いて、未来時間展望の知覚、社会的ネットワークの選択、感情的 well-being の変数間の関連の検証を行う。

II. 研究

1. 未来展望尺度の作成¹⁾

人生の残りの時間を無限と知覚するか有限と知覚するかという未来時間展望を測定する尺度として、Carstensen と Lang (1996) が開発した Future Time Perspective Scale (以下、「FTP」とする) がある。Future Time Perspective と名づけられたこの尺度は、「この先、いろいろな機会が私を待ち受けている」、「私の人生はむしろこれからだ」、「私の人生には、新たな計画を立てるための時間が十分に残っている」、「私の未来には限られた可能性しかない」などの項目を含み、人の目的意識性という特徴を測定していると考えられる。FTP は 10 項目の質問で構成され、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の 7 段階で評定する。FTP は、一構造からなる尺度として概念化され、時間が無限という知覚が有限という知覚へ移行する二極性連続体として考えられてきた。しかしながら、未来時間展望の有限と無限という知覚はそれぞれ独立して存在している可能性があることや、両方を同時に知覚することはあり得ることが考えられることから、未来時間展望の知覚は有限から無限という二極性連続体の一構造よりもより複雑な多次元構造になる可能性が指摘されている (Cate & John, 2007)。

本研究は、FTP の日本語版を作成し、確認的因子分析により尺度の日本人における適合性を検証する。FTP の尺度の因子構造や妥当性を検証した先行研究は現在、Cate と John (2007) によるもののみである。この研究では、FTP の将来の好機への展望 (focus on opportunities perspective) と限られた時間の展望 (focus on limitations perspective) の二つの下位尺度からなる 2 因子構造が最も適切であるということが示された (Cate & John, 2007)。因子構造について、本研究においても Cate と John の研究結果と同様に 2 因子構造になることを予想する。

方法

未来展望尺度を作成するにあたり、以下のような手続きを取った。(a) 日本語と英語に堪能な翻訳者が 10 項目の質問項目の翻訳を行った；(b) 翻訳した内容の整合性について本研究者が確認した；(c) 日本語に堪能な英語を母語とする米国人 (米国の大学にて博士課程修了) が、日本語の項目を英語にバックトランスレーションした；(d) FTP の原著者によって原版とバックトランスレーションを行った英語の項目の内容の整合性が確認された；(e) 本研究者が所属する大学院の学生と一緒に原版と日本語版の項目の内容を比較検討し、意味的

¹⁾本章は、老年学雑誌掲載論文 (池内・長田, 2014) を一部加筆・修正した。

等価性を確認した；(f) 原版と同じ 10 項目の日本語質問項目を決定した。

未来展望尺度のモデルの適合度は、確認的因子分析を行い確認した。モデルの信頼性は、クロンバックの α 係数を算出し検証した。

結果

未来展望尺度のモデルの適合指数 (comparative fit index: CFI) については十分な値 (.870) が得られた。本研究では、FTP 尺度の原著者への確認も含めバックトランスレーション手法を用いた結果、英文の尺度 (Cate & John, 2007) との項目および因子構造が一致した。従って、本研究で作成した未来展望尺度を用いて、英文の FTP 尺度で実施された海外の研究との比較を行うことが可能であると考えられる。今後は、様々な予想される要因と未来展望尺度の関連を検証することにより、人の心理的発達や well-being の維持過程の中で、未来時間展望がどのような影響を持つのかより明らかにすることが期待される。

付録

表. 未来展望尺度の質問項目と各項目の平均値および標準偏差

項目番号		平均値	SD
因子 I : 広い未来時間展望 <i>More open-ended time perspective</i>			
1.	この先, いろいろな機会が私を待ち受けている. <i>Many opportunities await me in the future.</i>	4.77	1.29
2.	私は将来に新たな目標をたくさん設定するだろう. <i>I expect that I will set many new goals in the future.</i>	4.27	1.20
3.	私の将来は可能性に満ちている. <i>My future is filled with possibilities.</i>	3.95	1.21
4.	私の人生はむしろこれからだ. <i>Most of my life lies ahead of me.</i>	4.00	1.31
5.	私の将来は無限だと感じる. <i>My future seems infinite to me.</i>	3.56	1.32

6.	私はこの先やりたいことは何でもできるだろう。 <i>I could do anything I want in the future.</i>	3.87	1.36
7.	私の人生には, 新たな計画を立てるための時間が十分に残っている。 <i>There is plenty of time left in my life to make new plans.</i>	4.01	1.34
<hr/>			
因子 II : 狭い未来時間展望 <i>More limited time perspective</i>			
8.	私には残された時間がもうほとんどないと感じる.* <i>I have the sense that time is running out.</i>	3.08	1.32
9.	私の未来には限られた可能性しかない.* <i>There are only limited possibilities in my future.</i>	3.79	1.42
10.	歳をとるにつれ, 時間が限られていると感じるようになった.* <i>As I get older, I begin to experience time as limited.</i>	4.21	1.47

* 逆転項目

註. 本論文で作成された未来展望尺度は、Carstensen Life-span Development Lab のホームページに FTP 尺度の日本語版として掲載されている。 < <https://lifespan.stanford.edu/projects/future-time-perspective-ftp-scale> > (2016年6月26日)

2. 高齢期の未来時間展望、社会的ネットワークの選択、感情的 well-being の関連

本研究は、高齢期の未来時間展望と社会的ネットワークの関連が感情的 well-being へ与える影響を検証する。aging well together モデル (Rohr & Lang, 2009) を参考にし、高齢者の中でも人生の時間の有限性が弱い人の場合には、広い未来時間展望を持つ若齢者と同じような社会的ネットワークを維持し、その結果として感情的 well-being の向上につながるという仮説を立てた。

方法

関東圏内にある高齢者向けの生涯学習施設に通う男女 294 人を対象に調査を行った。調査票の配布および回収は、施設の担当職員の協力を得て行った。回収数は 264 (回収率 89.8%) であった。

測定は、未来展望尺度、ネットワーク構造を調べる尺度、感情的 well-being 尺度を用いた。調整変数に、経済的ゆとりと主観的健康感を設定し、基本属性に性と年齢を加えた。

変数間の関連は、共分散構造分析を用いて検証した。有意水準は、有意確率 5%未満を有意差ありとした。分析は、性と年齢以外の分析項目に欠測値をもつものも分析に加えるため、完全情報最尤法を用いた。

結果

本研究は、高齢期の未来時間展望に着目し、未来時間展望と社会的ネットワークの関連が感情的 well-being へ与える影響を検証した。これらの関連の検証においては、aging well together モデルを参考にし、分析モデルを作成した。

本研究では、先が長いという知覚は社会的ネットワークの拡大と関連したが、感情的 well-being への効果は家族・親類のネットワーク拡大のみにより示された。社会的ネットワークに着目した活動理論は、高齢者は友人や知人の社会的ネットワークや社会的組織・グループの帰属が満足感などの well-being に効果があると説明している (Havighurst, 1961)。知人・社会的活動仲間、友人が感情的 well-being に有意な効果がなかった理由は、対象者の選択の問題が影響している可能性が高い。すなわち、本研究では、生涯学習施設に通う人々というすでに社会参加をしている高齢者に対象を限定しており、知人・社会的活動仲間、友人という変数については、高齢者の中でもこれらのネットワークが多い人に限定され、この変数の分散が十分に確保されているとはいえない。そのため、その効果が過少に評価された可能性が高い。

III. 総合的考察

Well-being を良好に保つことは高齢期の生活を安寧に送るための重要な要素の一つといえる。本研究は、高齢期の未来時間展望の知覚に着目し、未来時間展望の知覚という心理的要因と、社会的ネットワークの選択という社会的要因の相互作用が高齢者の感情的 well-being にどのように影響するかという変数間の関係メカニズムの検証を行った。先行研究により、未来時間展望の知覚が加齢と共に狭くなる現象は普遍的であることが示されているが、本研究では、高齢期における未来時間展望の知覚の変化は環境・社会的要因などの外的要因と関係するという仮説を立てた。

検証は2つの研究を通して行った。研究1では、SSTが重要な説明変数として用いている未来時間展望の知覚を測定する尺度（Future Time Perspective Scale; Carstensen & Lang, 1996）の日本語版を作成した。尺度の原著者への確認を含めバックトランスレーション手法を用いて検証した結果、英文の尺度（Cate & John, 2007）と項目および因子構造が一致した。したがって、本研究で作成した未来展望尺度は、英文のFTP尺度で実施された海外の研究と比較を行うことが可能だろうと結論づけた。

研究2では、aging well together モデルを参考にして分析モデルを作成し、高齢期の well-being 研究に未来時間展望の知覚という心理的要因を位置づけ、社会的ネットワークの選択という社会的要因との関連が well-being に与える影響を明らかにした。

本研究は未来時間展望の知覚に着目し、未来時間展望という心理的要因とネットワークという社会的要因を高齢期の well-being に影響する関係を検証した。未来時間展望の知覚の変化は生涯発達において非常に重要なイベントであるといわれるが、日本の老年学領域においても今後さらに検討が必要な概念といえる。本研究でも明らかになったように、高齢期の未来時間展望は他の要因と直接的もしくは間接的に関係することがあるため、未来時間展望と関連要因との検討をさらに行うことにより、高齢期における未来時間展望の仕組みを理解するのに役立つだろう。

本研究の限界と今後の課題について、まず、対象者のサンプリングについて挙げる。本研究は生涯学習施設に通う方々から協力を得て実施した。調査対象者は比較的健康で学習意欲が高く、高齢者の中でも若い高齢者に分類される男女が多く含まれていたといえる。

最後に、本研究のデザインから、未来時間展望と well-being の相互関連についての検討が十分にできていない可能性を挙げる。今後は、パネル研究によって、未来時間展望の知覚の変化が、社会的ネットワークの変化、さらに well-being にどのように効果があるかということについて、因果関係を特定する作業が必要である。

文献

- Antonucci, T. C. (1986). Measuring social support networks: Hierarchical mapping technique. *Generations*, 3, 10-12.
- Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (1990). Psychological perspectives on successful aging: The model of selective optimization with compensation. In P. B. Baltes & M. M. Baltes (Eds.), *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences* (pp. 1–34). New York: Cambridge University Press.
- Brandtstadter, J., & Rothermund, K. (2002). The life-course dynamics of goal pursuit and goal adjustment: A two-process framework. *Developmental Review*, 22, 117–150.
- Bucher-Koenen, T., & Kluth, S. (2013). Subjective life expectancy and private pensions. *Social Science Electronic Publishing*, 1-33.
- Carstensen, L. (2006). The influence of a sense of time on human development. *Science*, 312, 1913-1915.
- Carstensen, L. L. (1992). Social and emotional patterns in adulthood: Support for socioemotional selectivity theory. *Psychology and aging*, 7, 331-338.
- Carstensen, L. L., & Charles, S. T. (1998). Emotion in the second half of life. *Current Directions in psychological science*, 7, 144-149.
- Carstensen, L. L., Fung, H. H., & Charles, S. T. (2003). Socioemotional selectivity theory and the regulation of emotion in the second half of life. *Motivation and Emotion*, 27, 103-123.
- Carstensen, L. L., Isaacowitz, D. M., & Charles, S. T. (1999). Taking time seriously: A theory of socioemotional selectivity. *American Psychologist*, 54, 165-181.
- Carstensen, L. L., & Lang, F. R. (1996). Future time perspective scale. Unpublished manuscript, Stanford University.
- Carstensen, L. L., Mikels, J. A., & Mather, M. (2006). Aging and the intersection of cognition, motivation, and emotion. In J. E. Birren & K. W. Schaie (Eds.), *Handbook of the psychology of aging* (6th ed., pp. 343-362). San Diego, CA: Academic Press.
- Carstensen, L. L., Turan, B., Scheibe, S., Ram, N., Ersner-Hershfield, H., Samanez-Larkin, G. R., Brooks, K. P., & Nesselroade, J. R. (2011). Emotional experience improves with Age: evidence based on over 10 years of experience sampling. *Psychology and Aging*, 26(1), 21-33.
- Cate, R. A., & John, O. P. (2007). Testing models of the structure and development of future time perspective: maintaining a focus on opportunities in middle age. *Psychology and Aging*, 22, 186-201.
- Charles, S.T., & Luong, G. (2013). Emotional experience across adulthood: The theoretical model of strength and vulnerability integration. *Current Directions in Psychological Science*, 22, 443–448.
- Chen, F., Curran, P.J., Bollen, K.A., Kirby, J., & Paxton, P. (2008). An empirical evaluation of the use of fixed cutoff points in RMSEA test statistic in structural equation models. *Sociological Methods & Research*, 36(4), 462–494.
- Cumming, E., & Henry, W. E. (1961). *Growing old: The process of disengagement*. New York: Basic

Books.

- Demiray, B., & Bluck, S. (2013). Time since birth and time left to live: opposing forces in constructing psychological wellbeing. *Ageing and Society*, 34(7), 1193-1218
- Diener, E., Eunkook, M.S., Lucas, R.E., & Smith, H.L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin.*, 125(2), 276–302
- English, T., & Carstensen L.L. (2014). Emotional experience in the mornings and the evenings: Consideration of age differences in specific emotions by time of day. *Frontiers in Psychology*, 5, 1–9.
- Freund, A.M., & Ritter, J.O. (2009). Midlife crisis: A debate. *Gerontology*, 55, 582–591.
- Fung, H. H., Lai, P., & Ng, R. (2001). Age differences in social preferences among Taiwanese and mainland Chinese: The role of perceived time. *Psychology and Aging*, 16, 351-356.
- Gellert, P., Ziegelmann, J.P., Lippke, S., & Schwarzer, R. (2012). Future time perspective and health behaviors: temporal framing of self-regulatory processes in physical exercise and dietary behaviors, *Annals of Behavioral Medicine*, 43, 208-218.
- Gjesme, T. (1983). On the concept of future time orientation: Considerations of some functions' and measurements' implications. *International Journal of Psychology*, 18, 443–461.
- Hamermesh, D.S. (1985). Expectations, life expectancy, and economic behavior. *Quarterly Journal of Economics*, 100, 389-408.
- Havighurst, R. J. (1961). Successful ageing. *The Gerontologist*, 1, 8–13.
- 原田謙・杉澤秀博・浅川達人・斎藤民. (2005). 大都市部における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康. *社会学評論* 55(4), 434-448.
- Heckhausen, J., Wrosch, C., & Schulz, R. (2010). A motivational theory of life-span development. *Psychological Review*, 117(1), 32-60.
- Hicks, J.A., Trent, J., Davis, W.E., & King, L.A. (2011). Positive Affect, Meaning in life, and Future Time Perspective: An Application of Socioemotional Selectivity Theory. *Psychology and Aging*, 27(1), 181-9
- Huxhold, O., Miche, M., & Schüz, B. (2013). Benefits of having friends in older ages: Differential effects of informal social activities on well-being in middle-aged and older adults. *Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 69, 366–375
- 池内朋子・長田久雄. (2013). 社会情動的選択性理論の研究に関する文献的展望 —時間的展望を中心として—. *応用老年学会*, 7, 51–59.
- 池内朋子・長田久雄. (2014). 未来展望尺度の作成: Future Time Perspective Scale 日本語版. *老年学雑誌*, 4, 1–11.
- 外務省. 世界保健機関 (WHO) (概要) .
[<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000026609.pdf>] (最終検索日 : 2015 年 11 月 10 日)
- 小林江里香・深谷太郎・杉原陽子・秋山弘子・Liang, J. (2014). 高齢者の主観的ウェルビー

イングにとって重要な社会的ネットワークとは: 性別と年齢による差異. *社会心理学研究*, 29(3), 133-145.

- Kotter-Grühn, D., Grühn, D., & Smith, J. (2010). Predicting one's own death: the relationship between subjective and objective nearness to death in very old age. *European Journal of Ageing*, 7, 293-300.
- Kunzmann, U., Kappes, C., & Wrosch, C. (2014). Emotional aging: a discrete emotions perspective. *Frontiers in psychology*, 5, 380.
- Kunzmann, U., Little, T.D., & Smith, J. (2000). Is age-related stability of subjective well-being a paradox? Cross-sectional and longitudinal evidence from the Berlin Aging Study. *Psychology and Aging*, 15(3), 511-26.
- Kryla-Lighthall, N., & Mather, M. (2009). The role of cognitive control in older adults' emotional well-being. In *Handbook of theories of aging* (2nd ed., pp. 323-344). New York, NY: Springer.
- Labouvie-Vief, G. (2003). Dynamic Integration: Affect, cognition, and the self in adulthood. *Current Directions in Psychological Science*, 12(6), 201-206
- Lang, F. R., & Carstensen, L. L. (2002). Time counts: Future time perspective, goals and social relationships. *Psychology and Aging*, 17, 125-139.
- Lansford, J.E., Sherman, A.M., & Antonucci, T.C. (1998). Satisfaction with social networks: an examination of socioemotional selectivity theory across cohorts. *Psychology and Aging*, 13(4), 544-52.
- Lewin, K. (1939). Field theory and experiment in social psychology: concepts and methods. *American Journal of Sociology*, 44, 868-896.
- Mroczek, D. K., & Kolarz, C. M. (1998). The effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75(5), 1333-1349.
- 内閣府. 第1節 高齢化の状況. 平成25年版 高齢社会白書.
- 内閣府. 高齢社会白書〈平成26年版〉.
- [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/26pdf_index.html] (最終検索日: 2015年4月6日) .
- 中原純. (2011). 感情的 well-being 尺度の因子構造の検討および短縮版の作成. *老年社会科学*, 32(4), 434-441.
- 直井道子. (2001). 幸福に老いるために—家族と福祉のサポート. 勁草書房
- Roecke, C., Li, S., & Smith, J. (2009). Intraindividual variability in positive and negative affect over 45 days: Do older adults fluctuate less than younger adults? *Psychology and Aging*, 24(4), 863-878.
- Rohr, M.K., & Lang, F.R. (2009). Aging well together--a mini-review. *Gerontology*, 55(3), 333-43.
- Ryff, C.D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57(6), 1069-1081
- Scheibe, S., & Carstensen, L. L. (2010). Emotional aging: Recent findings and future trends. *Journal of*

- Gerontology: Psychological Sciences*, 65, 135-144.
- Seijts, G. H. (1998). The importance of future time perspective in theories of work motivation. *The Journal of Psychology*, 132(3), 154–168.
- 下島裕美・佐藤浩一・越智啓太. (2012). 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) の因子構造の検討. *パーソナリティ研究*, 21, 74-83.
- 総務省. 第3節 超高齢社会における ICT 活用の在り方. 平成 25 年版情報通信白書, 245-258.
- 総務省. I 高齢者の人口. 統計局ホームページ: <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi631.htm> (最終検索日: 2012 年 12 月 15 日).
- Stone, A. A., Schwartz, J. E., Broderick, J. E., & Deaton, A. (2010). A snapshot of the age distribution of psychological well-being in the United States. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 107(22), 9985-9990.
- Swift, H. J., Vauclair, C. M., Abrams, D., Bratt, C., Marques, S., & Lima, M. L. (2014). Revisiting the paradox of well-being: the importance of national context. *Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 69(6), 920-929.
- 都筑学・白井利明. (2007). 時間的展望研究ガイドブック. 京都: ナカニシヤ出版.
- WHO (World Health Organization). World Health Statistics 2014 (2014 年度「世界保健統計」).
- World Health Organization. (2015). World report on ageing and health. Luxembourg: WHO Library Cataloguing-in-Publication Data.
- Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271–1288.
- Zimbardo, P., & Boyd, J. (2008). The time paradox. New York, NY: Free Press.